

たるべきなどは焼おしで玄てのこるふえうの駒とともににつぎのかこひへはなちやるなり、焼印は國郡所々によりて印のかたちかはれり。○中五疋づゝかくすることあまた度にて事はてたり、其日はじめ追入たる駒の數六百餘にて、用にあたり引たて行しは百七十あまりなるべし、かく此大野十所がほどをめぐりてとることなれば、數のあまたなる事おもひやりぬべし、いといさましくめづらしきみものなり。○略 下

〔秦嶺館文集成田參詣〕始觀執駒記

余初來江都、則聞南北總多曠野、而牧馬蕃庶、夏月執駒奇觀也、心竊馳焉、旋及視佐倉學政、增得詳其說、曰城東十里有酒々井驛、遼路北轉、東折而行數里、設升字門、謂之木戸、踰則爲内野、一望可方十里、又東爲高野、方二十里、又南且西爲柳澤、方三十里、並處々突出、若懸疣然、謂之入野、并是而計、則不知其幾許里、以上本藩所管、置典牧二員、牧師數十人、隸焉、曰小間子、曰取香、曰矢作、曰油並牧長綿貫司之、總稱之曰七牧、就中油田獨阻、餘皆接壤、東遷東金臺、西瀕大和田、殆乎二百里云、牧之四邊、率多雜樹松林、峒中延袤數里、築壘周之、處處中斷、謂之烏貲、烏貲處也、其內又連下而缺上、右則屬上而缺下、是爲左右籠、各可容千匹、正面土階數級、踐以升壘、壘上作假亭、板隔之爲三階、前方數十步、是捕場也、每歲六七月之間、課役于數郡、蓋調列卒也、先期二日、令傍近村民驅野馬之匿山林者、謂之山拂、翌日列卒數千、裹糧宿圍四邊、逐出于峒中、謂之內拂、及期典牧駕長、黎明輕裝、與牧師數十騎、舉鞭縱橫馳騁、驅各處成群者、哀乎一處、既而或左或右、距數十步、並之而馳、又自後逐之、左右並馳者、蓋防其旁逸也、倏忽之際、自外壘驅入内壘、分卒扞衛斷處、相繼皆如前次第驅之、先聚于左籠、又驅趣右籠、此間典牧既下馬立階左、官使至則罄折迎之、官使一揖歷階、先升坐亭右間、典牧繼升、易服坐中間、駕長及醫師坐左間、書手二人侍亭前左右、牧師數十人、或持竿頭繫索者、或剪小